



特別展「もう一つの平家物語」

館長 中島誠一

いよいよ七月二二日から表記のテーマで特別展が始まりました。その見どころを紹介しておきましょう。

熊谷直実⇨敦盛というイメージは、古典文学、浄瑠璃、歌舞伎に興味のある人ならだれしもが抱く図式でしょう。敗走する平家を追撃する直実の目にとまったのが、如何にも位の高そうないでたちをした武将でした。組み伏せて顔を見ると薄化粧をした一六〜一八歳ぐらいの自分の子どもと同年齢の若い武将、敦盛でした。平家物語巻九敦盛はまさに「公達哀れと青葉の笛」の世界です。

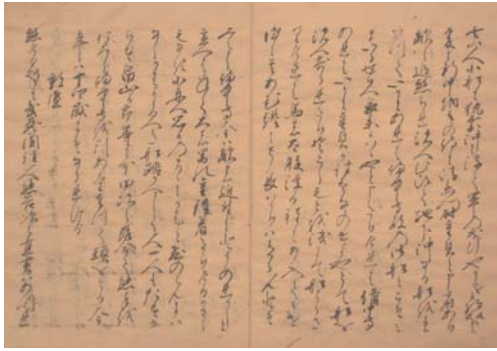
この事件を契機として直実は「坂東の剛のもの」から「厭世の観⇨諸行無常の世界」に次第に心染めていきます。その気持ちを決定づけたのは、流鏝馬の役割分担と所領争いだと言われています。出奔した直実が求めたのは浄土宗の開祖、法然上人との出会いです。法然は殺生を生業とした直実

に「ただ念仏を唱えれば往生する」と説きます。この言葉によって覚醒した直実は法然に弟子入り、法名を「法力房蓮生法師」とし念仏三昧の日々を過ごします。そして「またたく間にこの世に戻って皆を救うことができる」上品上生の願を予告往生によって遂げることになります。



直実往生の場面。法然上人絵伝（草津市宗栄寺蔵）から。筆者横井金谷は法然上人絵伝（知恩院蔵）を実際に見てこの往生シーンを描いています。展示はその比較が楽しめます。

さて展示では、敦盛と直実の出会いを京都当道座の最高官位である検校、奥村家に代々伝わった「平家物語」一二巻（江戸時代・京都市有形指定文化財）から読み取っていたいただけます。若き日の直実の姿を京都市法然寺蔵の直実肖像画（写真展示・部分）から見取ることができます。そして専修念仏の蓮生へと生まれ変わった姿を、今回初出陳となる富山県高岡市西福寺蔵の木造蓮生法師坐像や法然上人から戴いた六字名号を鈍彫りで仕上げた版木などから知ることがができます。



平家物語

そして上品上生の願が叶った蓮生の予告往生の様子を京都知恩院蔵の法然上人絵伝（国宝）（写真展示・部分）や、近江の画人、横井金谷が描いた法然上人絵伝四幅（寛政二年（一七九九）（草津市指定文化財））から伺うことができます。

忘れてはならないのは長浜曳山祭 子ども歌舞伎で「熊谷陣屋」は上演回数ベスト2にランクされるほどの人気演目なのです。長浜の人たちを魅了し続ける理由がどこにあるのか。数々の小道具やパンフレットから類推するのも楽しみです。ただし熊谷陣屋では敦盛は生きて直実の子どもが身代わりとなるのです。天皇家の血脈を継承する敦盛は敵であっても殺してはならぬと暗に直実に指示したのは「源義経」でした。

この熊谷陣屋が秋には子ども歌舞伎教室で上演披露されます。今から楽しみですね。

*特別展「もう一つの平家物語」は九月二日（日）まで開催しています。



特別展の開催を記念して、琵琶法師、片山旭星さんをお迎えした演奏会を開催します。今回は展示で紹介している「敦盛」平家一門最後の戦いを描いた「壇の浦」などまさに諸行無常の響きの中に身を置いて戴ければと思います。もうお馴染みの芸能研究家、土居郁雄氏のわかりやすい解説にもご期待ください。



平家物語の全体を流れるテーマは諸行無常すなわち万物は常に変化して少しの間も留まらないという仏教の根本思想です。ところがそれをとどめようとしがき苦しむのが人間の姿でもあります。平安時代から巷間の盲僧で琵琶を弾ずるものがいました。鎌

倉時代になると、平家物語を琵琶に合わせて語り始め、すなわち「平曲」（平家物語に曲節をつけて琵琶の伴奏で語る）として流布します。今回の演者、片山旭星さんは京都市在住、地神経を誦し余興に物語を歌って歩く九州の盲僧琵琶の流れを継承する筑前琵琶の第一人者です。

地神とはその土地に住み着く土着の神のことであり、良く知られている土公神は住まいする土地の守護神ではありますが、祟りも激しい神であり祓い浄めるために御経を上げたりします。その余興に平家物語を奏していたのです。

さて能書きはこれくらいで兎に角、この夏の夕べは「曳山博物館へ」
日時は平成二四年八月一日（土）一八時から一九時三〇分ごろまで
場所は、本館伝承スタジオで入場料は無料です。奮ってご参加ください。（中島誠一）

曳山博物館子ども歌舞伎教室開講

平成二一年度より開催しております「曳山

博物館子ども歌舞伎教室」を今年度も開催することとなり、平成二四年六月二三日（土）に開講式を行いました。開講式終了後にオリエンテーションを行い、外題の発表、配役決めがありました。そこには配役を決める指導者の苦悩がありました。

本年の外題は平家物語を題材とした「一谷嫩軍記 熊谷陣屋」に決定しました。登場人物は「熊谷直実」、「弥陀六実は弥平衛宗清」、「源義経」、「堤軍次」、「梶原平次景高」、「義経四天王 亀井、片岡、伊勢、駿河」の四人、そして、女形「熊谷妻相模」、「藤の局」の計十一人です。これを公募で集まった十一人、五年生男子三人、四年生女子一人、二年生男子二人・女子四人、一年生男子一人に配役するわけです。まず、一人一人に自己紹介を兼ねて声を出させます。次にセリフを一口言わせませす。これを聞いて、配役をしなければなりません。指導者と児童たちはこの日にはじめて顔を合わせましたので、全く素性も素質もわかりません。そんな中で役の割り振りがはじまりました。主な男役（熊谷、弥陀六、義経）は年長者の五年生の男子三人を中てま

した。次にセリフが少なく出番が短い「梶原」は学年を考慮して一年生が務めることになりました。さて、ここからが苦悩のはじまりです。女形を女子にさせるか男子にさせるかです。女形は二役しかありません。それに対し女子は五人。しかも、この女形は二役ともセリフも多く、非常に重要な役です。歌舞伎



稽古

はご存知のとおり、立役（男役）も重要ですが、女形の役は所作も多く、その難しさは立

役以上かもしれません。そして、振付の先生が出された結論は、あえて女形に二年生の男子二人をあて、残りの五人の男役に女子五人をあてられました。実は、曳山祭の時も同様でこの配役を決めるとき、非常に苦労されています。一度決めたらもう変えることができません。これが歌舞伎の出来の良し悪しを左右するからです。振付の先生は初対面の子どもを見て、数分でこの決断をしなければならぬという苦悩があるのです。（小池充）

*「曳山博物館子ども歌舞伎教室」・・・曳山祭の子ども歌舞伎の普及を目的に平成二一年度に開講した。毎年、市内の小学生（男女とも）を対象に公募によって受講生を募集し、三〇回程度の稽古したのち、一月上旬に発表会を行う。その際、衣裳、髪を着用、化粧をして、曳山子ども歌舞伎と同様の装いで行う。



長浜では囃子のことを「シャギリ」と呼び、長浜曳山祭だけでなく、市内で行われ

るイベントなどでも演奏されることのある長浜を代表する芸能の一つです。特に長浜曳山祭において欠かすことのできないシャギリは、今ではその多くが地元の方によって演奏されていますが、昭和初期までは近郊農村の囃子方と呼ばれる演奏家が担っていました。ところが、昭和四〇年代以降になると、就業形態の変化などにより近郊農村からのシャギリがなくなり、必然的に地元の住民が担うものへと変化していききました。そして現在では、昭和四六年に結成された長浜曳山祭囃子保存会が中心となり、シャギリの伝承普及および後継者の育成を行うまでになりました。

今回の展示では、この長浜曳山祭に欠かすことのできないシャギリについて、その担い手たちが近郊農村から地元住民へと移行した様子を探るとともに、長浜曳山祭以外の湖北地方の囃子などについても紹介します。また、以前長浜曳山祭でシャギリを担当していた近郊農村の一つである長浜市唐国の囃子演奏会なども予定しています。（中山芳章）

*企画展「湖北のソウルミュージック シャギリ」は九月三日(月)～九月二十八日(金)まで開催します。

あとがき

平家琵琶の「諸行無常の響き」とはどんな響きなのでしょう。うか、もの悲しい響きなのでしょう。とても興味があります。諸行無常は平家物語だけでなく、「ゆく河の流れは絶えずして」と語る方丈記にもあります。「無常」と言うとは「はかない」とか「むなしい」といった感じがしますが、「流れゆくもの」には例外がなく、たとえそれが悲しいことであっても、それがずっと止まることがないとも言えるわけで、そうやって考えれば救いにもなる有り難い教え（というか真理ですが・・・）と言えます（平家物語では「盛者必衰の理」です）。ちなみにソクラテス以前のギリシャには「万物は流転する」と言った人がいました。「人は同じ川に二度入ることはできない」とも言いました。ああ、これは普遍的な思想なんだなあ、と思います。万物は流転するので、今日のギリシャ危機もいざれ収束してもとの暮らしが戻ってくるのでしょうか。そんな甘いことはない？ それはともかく、諸行無常はオプティミズムの源にもなりうる教えです。（大塚映明）